

第十二條

せし式部は官名形をバ元徳正慶の頃和泉國より出て
仕つまゝ女房なるし

自修導引圖序 第十三條

十年前小導引圖敷通を寫上をあたし其序引をつくる即
左小志るを

導引按躄之法見素問異方法宜論及血氣形志篇是運轉
血氣之術也明高瀧遵生八牋延年却病牋中載導引法其
書目八段錦導引法靈劔子導引法陳希第二十四時坐功
法天竺按摩十八法婆羅門導引法羅漢導引法等也乃知
是早既有此方術焉此圖本舊傳於清舶蓋本五禽之戲排

附餘

為二十則顧導引也者自修尤可也往者濱田彦醫員二官
齡文將翻鏤焉而問序於余余乃序未果而卒余摹一通頒
白以來晨夕中夜學此圖狀自修之而不罷竟乃為僻於是
乎逮于今五内四末健如也呂氏春秋古樂曰昔陶唐氏之
始陰多滯伏而湛積水道壅塞不行其原民氣鬱闕而滯着
筋骨瑟縮不達故作為舞以宣導之予意者應是自修導引
之始在道家則吐納鍊氣之術也攝生家若欲學之者其勿
懈矣

天保二年春三月

占春老人曾繁

繁按清畢阮新校正呂氏春秋注云陶唐氏堯之號孫云陶

唐乃陰康之誤誘不觀古今人表妄改呂氏之本文顏注相如傳云古今人表有葛天氏陰康氏

再圖叢を記 第十四條

公曩小品處此真圖を哀集し玉の漢蘭の冊子牒帖は堆を形し架上に盈たり固より斯方四方に産ハ一時につどい秋の木名葉をかたつむお如く画工數人をくて寫せしむ辰牌より申のさがりよで筆硯ふ間ふく週歳のうちふ庶品に大譜のよくなるしに彼乾隆穀譜授時通考中ふ乾隆穀譜を扱む青在堂画譜といつど豈とをふ踰るること能く觀覽し玉ふ列侯喧傳して好事の人する所能りふに寛閑の游戲

附餘

といつど一種の鴻寶となりぬ

茉莉花を辨む 第十五條

むかし茉莉花を辨むづしと此命あり記上しける茉莉花ハ慶長の比ふ中山よに致をとど其土名モリニクワ此名は蓋し茉莉二字唐音メリイに訛なるづし近來藤本の種を素馨と稱して貢たり今

官園ふ培養す通雅ふ云茉莉有藤有木清の吳徐鳥徐園秋花譜ふ云末利番語無定字或稱素馨素曰質馨曰氣此書ハ書中ふ全ふに説ふ據ハ茉莉素馨ハ則一物なはこと明ぬ方密之通雅ふをやく既に藤あり木ありといふ亦一

證形も綱目よりいゆむ志らばて二物とあそのみ○嘉
吉年刻の節用集は茉莉をモリシクワと志はたりされ
ばをやいづちよとの種タネをつよふなるべし

本府聖廟 第十六條

安永のはじめ聖廟を創建し玉ふ即造士館あり春秋祭祀の式は
江戸昌平聖廟の式よふなるべし昌平聖廟の式ハ蓋し
孔魯に遺則なるふやいにしへ忍輪津の崗聖廟を創建し
玉ふとぞ東叡山寛永寺の地あり
忍輪津の學校元禄年のはじめ昌平口外に遷今より

附録

五十年前祭酒林公衡再建し猶學範に修整し廟堂を莊
麗し玉ふ犬冢某の昌平志に詳悉せしさる忍輪津の學規ハ左方ふ
あるは

忍岡塾規

分經史文詩和學五科以十幹立十等而就各科量其短長
以激厲之其規如左

五科各甲乙丙為上等丁戊己為中等庚辛壬癸為下等經
科史科和學科者漸試之待其効而進一等文科其所作儘
佳者及五篇則進一等其冠群作者一篇當五篇詩科者其
所作儘佳者絕句二十首四韻律十首六韻律以上七首冠

群作者絶句四韵五首排律三首則進一等

塾員

大長員無定員之長五科共升甲等者有此稱

左員長右員長權左員長權右員長

諸員有求講解者則可開筵諸員有疑問則就而正之

諸員詩文草稿可訂正之

每科諸員有進步者則漸試可推舉之不可有親踈偏党之

私

員實生 經科史科文科詩科中等共進一等則充之

員特生 經科至上等者雖不兼他科而授此號歷史科和

附餘

學科其至上等者可准之

員秀生 文科詩科中等者共進一等則充之

萌生 在下等者列中等則充之

右寛文六年丙午四月廿四日春齋記後七年壬子再録

斯方聖廟を建る事ハ益一下野國足利をととせり

世小いふハ小野篁の制ありとせむと志今尚學校の遺

りらび其考證ハ常山筆記にえたり制何て廟主年筮取るといつり又室町氏より北條

顯時の比人學を好む武藏金澤一書院を建聖廟を設く

佐々木士
坦活版考

中山聖廟 第十七條

琉球の聖廟は徐葆光の中山傳信録云廟在久米村泉崎橋北門南向進大門庭方廣十餘畝上設拜臺正堂三間夫子像前又設木主四配各手一經正中梁上亦摹御書萬世師表四字程順則碑云萬曆間紫金大夫蔡堅始繪聖像率鄉中縉紳祀於家康熙十一年前紫金大夫金正春啓請立廟王允其議十三年告竣越明年塑聖像於廟中左右立四配王命儒臣於春秋二仲上丁日行釋奠礼五十八年順則啓請祭孔子用大牢祭啓聖公用少牢今礼如議おもふ順則の説を康熙の撰孔魯聖典に据ふるべし

附餘

本府醫學院 第十八條

醫學院は安永三年城外に創建し玉の日講を命じ玉ふを以て學規ハ略江戸醫學館の規則とおねし江戸醫學館を舊名躋壽館多紀玉池氏の創建なり今は官局なり官醫の教導を素靈八十一難經をばしめ日講あり後世に經方の會讀も日課あり生徒各々病因療方の醫案を述し學長其甲乙を判じ其考試と選舉知事に致し其的實此人一等に進む○仙臺會津西藩の醫學は日講月評ありて毎月病案の述ありて學長

の考試ありとぞ

神農祭日 第十九條

農皇の祭日は四月十二日なりといひ西清船此説坊間
估の談此流習ぬふづ三皇の事ハ夢の如く覺るゝとく真ふ
然り

關帝祭日 第二十條

關帝歸天の祭ハ五月十三日まゝ二月八月上の戌日ハ春
秋の祭と西清船
估の談

附餘

跋

臣槃

侍醫の列ふ侍ること茲ふ年何り嘗て年録取ふ
づき 内命何り謹て 命を奉りたまはれ吾の職ハ
何ら自バ企ミテ及つげんや心ハ辭し侍らんとたもひは
かれど亦得づあらばさて史館ハ日録あきと 公事ハ
かこふふし何らふれが志あさぞいてや日録取抄采
しはる 公事の外臣庶及び封内の民取憫之玉ハ潜徳
取しき博愛を施したまふゆしく取舉つらひ且ハ好古
清趣を仰望せし條々をつと一年録ハ擬し 委命を奉
りたまはれと舉て十取もらはる似たり譬ハ紅翠の毛羽

289.1
2

跋

とと里く犀象の角牙を遺さふ異形らど猶舊聞故省念
して後ふ繼増せむ

壬辰孟夏

臣
曾繁
識

仰望節錄附餘終